

児童の自己主張行動と対人交渉方略との関連

— 公的自己意識・自尊感情・対人不安傾向を媒介変数として —

船 曳 泰 孝

I 問題と目的

現代において、対人関係の問題は複雑化し、人々の心にストレスを与える大きな問題となってきている。そういった現代を色濃く反映している問題として学校場面におけるいじめや不登校などがあげられる。その背景には、社会の問題や個人の心の問題ということに加え、児童の社会性の問題が考えられる。特に、その社会性の中の一つの概念である自己表現のあり方を示す概念として、自己主張 (assertion) という言葉があり、平木 (1993) は、「自分の気持ち、考え、信念などを正直に、率直にその場にふさわしい方法で表現し、そして相手と同じように発言することを奨励しようとする態度」をアサーティブなあり方として述べ、訳語を用いず、アサーションと記している。この互いに伝え合い、聞き合う気持ちを持っていることは、「他者の権利を侵害しない」自己表現のための前提条件とも考えられる。このアサーティブなものに加え、人間関係の持ち方のパターンには、攻撃的自己主張 (自分のことだけ考えて、他者を踏みにじるやり方) や、服従的自己主張 (自分よりも他者を常に優先し、自分のことを後回しにするやり方) の合わせて3つのものがあると考えられている。この前者の2つは自分の考えを相手に押しついたり、自分の気持ちを過度に抑える点で望ましくないとされており、アサーティブな自己主張行動はたとえ、そのやりとりを通して時間がかかったとしてもお互いの意見を尊重する点で好ましいとされている。では、好ましいとされるアサーティブな主張行動と、好ましくないとされる攻撃的・服従的自己主張とを分ける要因にはどのようなものが考えられるのだろうか。

この3パターンの自己主張行動それぞれに対して、対人交渉方略 (以下INS) の発達レベルや、公的自己意識、自尊感情、対人不安傾向という個人特性など他の要因からどの程度予測可能かということ調査・検討した。

II 研究1

【問題】

思春期・青年期の自己主張行動に関する研究は、非常に少ない。いくつかある研究においても、日本の先行研究においては「自己主張をしているかしていないか」といった一軸で考えられているものが多く、平木の述べるように3種類それぞれの主張行動のパターンがあるとい

うことについては、モデルとして想定されながらも、十分な検討がなされていない。そこで本調査では、自己主張行動のパターンとして「攻撃的」「服従的」「アサーティブ」の3つを設定し、それらの関係を検討すること、対人交渉方略における場面毎の分析を行うこと、それぞれの因子毎のまとまりの関係を検討を行うことを目的とする。

【方法】

(1)調査対象者：262名の中学生男女

(2)尺度

①自己主張行動尺度：平木 (1993) の「自己表現の特徴一覧表」を参考に、新たに項目を作成。各下位尺度はA. 服従的 (12項目)、B. 攻撃的 (12項目)、C. アサーティブ (12項目) の合計36項目、過去1ヶ月の間に同級生に対して行った自己主張行動について4件法で尋ねた。

②INS：同級生との葛藤を文章で記述した仮想場面とそれに対してセルマン理論に対応する対処法を提示し、自分ならどのようにするかを方略産出、方略欲求、方略選択の3つのステップで尋ねた。回答は4件法で求められた。

【結果】

これらの各変数に対して、因子分析を実施したところ、自己主張行動は仮説と一致した3因子 (服従的8項目、攻撃的7項目、アサーティブ7項目の合計22項目) が抽出され、INSについても、各ステップで、他者変化・低レベル、自己変化・低レベル、高レベル、の3因子が抽出された。また自己主張行動間では、攻撃的-アサーティブ間でのみ有意な相関が見られ、INSでは3ステップの同じ因子名間で非常に強い相関が見られ、各ステップで方略が一貫していることが示された。さらに、この自己主張行動とINS間の相関を検討したところ、攻撃的-他者変化・低レベル、服従的-自己変化・低レベル、アサーティブ-高レベル、間で有意な相関が見られた。

【考察】

結果より、自己主張行動とINS間での関連が確認された。また、ステップ間の相関が高く、中学生における認知のステップがセルマンの指摘しているような段階を追っているかどうかは明らかに出来なかった。しかし今回の調査では、発達段階としてどのようなINSが実際の自己主張行動につながるかに注目していきたいために、研

究2では対人交渉方略の「方略の選択と実行」のみをとり上げ、そこから自己主張行動につながるまでのプロセスについて検討し、それに加え、どのような個人特性が影響を与えているのかについて検討する。

Ⅲ 研究2

【問題】

研究1において、発達レベルと自己主張行動間には何らかの関係性があることが示された。すなわち発達レベルがある程度達成された後に、自己主張行動は表現されるといえるだろう。しかし、「分かっている（＝発達レベルが達成されたとしても）、そうは出来ない」といったことがあり、それは個人の考え方や性格特性に大きく左右されるものであると考えられる。そこで、研究2では対人不安傾向などのような個人特性がどのように生徒の自己主張に影響するのかということについて調査・検討を行う。

例えば、対人不安傾向が高いことは、社会行動の妨げになったり、対人関係を持つ経験自体を減少させたりするといった意味で、高レベルのINSを減少させることを予想させる。そのため、対人不安傾向が高い児童は、高レベルの方略を選択せず、自己変化・低レベルのINSの方略の選択をしやすいことが考えられる。また、自尊心が高い児童は、ちょっとした非難や指摘を攻撃的なものとして認知するために、報復としての攻撃的行動が高くなることが考えられる。さらに自分自身に自信があるために、他者からの批判や指摘が予想されたとしても意に介さない傾向があると考えられる。そのため他人からのフィードバックをあまり気にすることなく、強気で関わっていけるために、それがさすれば他者変化・低レベルの方略を選択させ、そのため、攻撃的な自己主張行動を産出しやすいことも予想される。最後に、公的自己意識が高い児童は「他者から見られている自分」を強く意識するため、その場面から早く撤退するための方略（自己変化・低レベル）や、あるいは社会的な場面においてより賞賛を浴びやすい、高レベルな方略を選択するため、服従的な自己主張行動やアサーティブな行動が生じやすいのではないかと予想される。これらの点を検討することが研究2の目的である。

【方法】

(1)調査対象者：221名の中高生の男女

(2)尺度

①自己主張行動尺度：研究1の結果に準じる。

②INS：研究1の結果より「方略の選択と実行」に関し

てのみ、4件法で回答を求めた。

③個人特性：A. 対人不安傾向は松尾（1998）の「対人不安傾向尺度」より、因子負荷量の高いもの10項目、B. 自尊感情は桜井（1983）の「コンピテンス測定尺度（日本語訳）」より因子負荷量の高いもの7項目、C. 公的自己意識は桜井（1992）の「公的自己意識尺度」より因子負荷量の高いもの6項目を選択し、それぞれ3つの個人特性について、4件法で評定を求めた。

【結果】

各変数に対して重回帰分析を実施したところ、自己主張行動に対するINSからの経路と個人特性からの経路の存在が確認された。攻撃的に対しては、自尊感情とINSの他者変化・低レベル、服従的に対しては、対人不安傾向とINSの自己変化・低レベルと高レベル、アサーティブに対しては、公的自己意識とINSの高レベルからのパスが存在し、公的自己意識からのパスが非常に大きいことが明らかになった。

【考察】

自己変化・低レベルのINSに対して、対人不安傾向と自尊感情からの2つの経路が、服従的な行動に対して、高レベルからの経路もあること、そしてアサーティブな自己主張行動に対し、公的自己意識からのパスが非常に大きいことは興味深い。自己変化・低レベルのINSに対して、個人特性からの2つの経路があることは、対人不安傾向から促進的に、自尊感情からは抑圧的に働いていることが推測される。また、服従的な行動に対し、高レベルからの経路があることは、高レベルの方略を選択できる生徒は、その場で服従的な行動をとった方がよいか、アサーティブに表現したらよいかを判断し、状況に応じて適宜使い分ける様子がうかがえる。そして、公的自己意識が高い生徒は、周囲の目を気にするため、社会的に受け入れられやすい、アサーティブな自己主張行動をとっているということが明らかにされた。これらの結果から、自己主張行動はINSの発達レベルと個人特性の2つの経路により規定されることが明らかになった。

Ⅳ まとめ

総じて、今後は以下の3点が検討される必要があると考える。①本研究での調査が児童の普段の生活をどの程度反映しているかを探ること、②他の個人特性の介在可能性の検討を行うこと。③これらを元にしたどのような介入が適切な自己主張行動を促す上で重要であり、変化させる可能性があるかを探ること。これらが今後自己主張行動研究を行う上で重要な課題であろう。